

太田耕造全集

第五卷（研究編）

第五卷 〈研究編〉はしがき

太田耕造先生は昭和五十六年十一月二十六日に逝去された。今、平成四年十一月、『太田耕造全集』第五卷の「はしがき」を記すに当たり、文字通り指折り数えてみると、すでに十一年の歳月を経たことになる。十年一昔を越えてしまった。今もご生前中のことか昨日のように思えるものにとっては、あまりにも早い時の流れを感じざるを得ない。

『太田耕造全集』もこの第五巻をもって完了する。そこで今までのことをここで年譜的に振り返ってみると、

1、本書が計画され始めたのは、先生が逝去されてから半年後の昭和五十七年五月二十四日、亜細亜学園内に「太田耕造先生顕彰事業実行委員会」が構成され（委員長・武部啓教授）、その事業の一環として『太田耕造文集』を刊行しようということになったのに始まる。直ちに編集委員会が作られ、夜久正雄教授が委員長に就任された。

2、編集にかかり出してから間もなく、先生の記事を網羅すれば、とても一冊の『文集』で間に合うようなものでないことが明らかになり、『全集』として全三巻にまとめることとなった。その分類は、

第一巻は、大正十三年頃から昭和二十九年までとし「獄中日記」を含める。

第二巻は、亜細亜大学創設の昭和三十年から亡くなられるまで。

第三巻は、写真集、書簡集、追悼文集、年譜等とし、第一巻第二巻の補遺を加える。

ということとした。

3、最初に比較的原稿の整っている第二巻を刊行し、先生の一周年のご命日である昭和五十七年十一月二十六日にご霊前に捧げようということになり、学内にそれぞれ本務を持つ各編集委員が、夏休みに食い込んでまでの作業によって予定通り上梓することができた。八八二ページに及ぶ大部のものとなった。

4、翌五十八年の十一月には第一巻を刊行することになり、これまた予定通りに完成することができた。ページ数は奇しくも第二巻とほぼ同じ八八四ページであった。

5、この頃新たに「獄中日記」に続く膨大な日記が発見された。昭和二十二年から四十二年に至るものであった。そこで当初の予定を変更し、これを第三巻に掲載することとなった。そのため全三巻で完了予定であった全集は、新たに一卷追加して、補遺および書簡集をまとめることとなった。

6、第三巻は、予定通り翌五十九年十一月に上梓された。九〇二ページになった。

7、新たに企画された『第四巻（補遺）』は、翌六十年十一月、先生のご命日に刊行された。五〇二ページであった。

こうして『太田耕造全集』全四巻の刊行を終えた。編集委員たちはみんな「ここに全集の編集を終わったのであるが、まことに感慨無量なものがある」（「第四巻はしがき」）という気持であった。

8、ところがその頃からすでに平成三年十一月四日に迎える亜細亜学園創立五十周年記念の諸行事が考えられ始め、徐々に具体化されだしていた。その一環が各学部・部・研究所による『記念学術論文集』の刊行であった（委員長・山口年一教授）。その別巻として『太田耕造の思想と教育』を刊行しようということになった。これは太田先生の思想・建学精神・伝記についての諸研究をまとめようというものであった。そしてこれは企画当初から『太田耕造全集・第五巻（研究編）』として刊行しようということであった。計画は順調に推移し、予定通

り創立五十周年記念日に刊行された。

9、この間に、本巻の「太田家文書・前書き」に記されているような経緯によって、新たに「太田家文書」が発見された。これは唯に太田先生の研究に資するだけでなく、幕末研究の一資料ともなると考えられた。それに新たに先生の学生時代の資料、文部大臣時代、福島テレビ関係資料等々も出てきた。

それにもまして編集委員一同が、『全集』の刊行中からぜひ刊行しなければならぬと願っていたものがあつた。それは『全集』の索引である。これについては本巻の「あとがき」に記されているように、一同相應の努力を傾注し、ほとんど原稿は完成していたのであるが、一部未完成の部分があつて延引の止むなきに至っていた。

10、そこで別巻「太田耕造の思想と教育」を『全集』に加えるに際して、これらの新資料並びに索引を加え、改めて『太田耕造全集・第五卷（研究篇）』を刊行しようということになった。それが本書である。本書が成るに当たっては、別巻作成の際の編集主任であつた栗田充治教授が再び中心となつて大変な努力をしてくださった。特記して謝意を申し述べたい。こうして第五卷は完成し七二〇ページに及ぶに至つた。

昭和五十七年五月二十四日から発足した『太田耕造全集』編集・刊行の事業は、十一年の歳月を要し、最初の『文集』の予定から全五巻の『全集』に変貌し、総ページ三千九百ページに及ぶ大部のものが作成され、ここにすべてを完了した。

しかしまた新しい資料が発見されないうちにも限らない。そのときはまた新たな努力を結集して、より完璧に近いものが作られるよう念願する。どうかこの『全集』が大いに利用され、太田先生のご精神が亜細亜学園に漲るよう切願するものである。それが亜細亜学園に身・命・財のすべてを捧げ尽くされた太田耕造先生に対する何よりの御恩返しになるものと確信する。

最後に、第五巻のみならず、『太田耕造全集』全五巻の刊行に当たってご協力を賜った方々に深く御礼申し上げます。本来ならば一々お名前を挙げて謝意を表すべきであるが、それも不可能に近いほど多くの方々になるので割愛させていただきます。ここに重ねて深く感謝の意を表し、擲筆する。

平成四年十一月二十六日

太田耕造全集編集委員会

委員長 梶 村 昇

凡 例

一、本書は太田耕造全集の研究編とし、次の文章を収録した。

(1) 亜細亜学園五十周年記念学術論文集別巻『太田耕造の思想と教育』（平成三年十一月刊行）の左記の内容。ただし、文章は誤字などの訂正と執筆者による部分的修正を加えたうえ再録した。

第Ⅰ部 研究篇 一、太田耕造の思想

二、「自助・協力」の建学精神

第Ⅱ部 伝記篇 （座談会「学長時代の太田耕造を語る」を除く）
年譜および執筆・演述目録

(2) 太田全集四巻の刊行後発見・収録された以下の参考資料。

1、太田家本家に保存されていた古文書

2、太田先生およびその周辺に言及した文章と記録の該当部分

3、東京中学校時代の学業成績

4、金沢の第四高等学校時代の学業成績

5、東京帝国大学時代の履修科目一覧

6、昭和五十五年の太田先生の遺言（『太田耕造の思想と教育』第二部伝記篇の座談会「学長時代の太田耕造を語る」ではじめて公表されたもの）

7、書簡

8、太田全集四巻に漏れていた太田先生の文章

- (3) 太田全集四巻および『太田耕造の思想と教育』の本書収録部分についての総索引(人名、地名、事項)
二、収録文は従来と同様、原文に忠実であることを原則とした。太田全集四巻では正漢字・正仮名遣いも混じっており、また外国人名・地名等の表記も原文に従っているので、索引では無理に統一せず、まとめられるもののみ一項目にまとめた。

目次

第五卷〈研究編〉はしがき

凡例

第Ⅰ部 研究篇——太田耕造の思想

1	太田精神における東と西……………	古川	哲史	3
2	太田耕造と平沼騏一郎……………	夜久	正雄	26
3	岩田愛之助と太田耕造……………	中村	義彦	40
4	江原素六・杉浦重剛と太田耕造……………	関	正臣	54
5	山川健次郎と太田耕造……………	佐藤	司	68
6	太田耕造と内村鑑三……………	梶村	昇	85
7	二宮尊徳とアダム・スミス……………	飯島	正	104
8	太田耕造とアダム・スミス……………	藤田	至孝	122
9	太田耕造とサミュエル・スマイルズ……………	室伏	武	135
10	広瀬淡窓と太田耕造——個性尊重の開かれた教育精神——……………	栗田	充治	151

11	日本現代アジア主義の論理と実践——太田耕造の場合——	譚 汝謙	160
----	----------------------------	------	-----

第II部 研究篇——太田耕造の教育理念——自助・協力の建学精神

1	自助・協力と聖書——太田学長のキリスト教的回想——	武部 啓	199
2	太田先生の「自助・協力」	夜久 正雄	209
3	建学精神の本質と課題	山田 清市	219
4	建学精神が生まれたころ	梶村 昇	229
5	太田耕造と建学精神	室伏 武	241
6	「自助・協力」の建学精神	千々和純一	256
7	太田先生の人柄から偲ぶ建学の精神	鈴木 薫	263
8	「自助＝協力」という読み方——建学精神の今と昔——	栗田 充治	273
9	今日的視点での建学精神を考える	稲葉 幹次	281
10	『建学精神を語る』の成立について	中村 義彦	290

第III部 伝記篇

1	二本松時代	千々和純一	297
2	学業時代——入信の前後——	梶村 昇	305

3	興国同志会・国本社時代	夜久 正雄	322
4	弁護士としての太田耕造	清瀬信次郎	343
5	政治家時代	衛藤 藩吉	356
6	巢鴨時代	古川 哲史	368
	第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ部執筆者一覧		382

第Ⅳ部 資料篇

1	太田家文書	385
一	太田氏家譜 全	386
二	太田氏家譜 二	403
三	太田家譜	407
四	年譜	432
五	御用金御才覚金等写	437
2	聖学院時代資料	451
3	東京中学時代の学業成績	459
4	第四高等学校時代資料	460
5	東大時代資料	465

一 学籍及び履習科目一覧	465
二 森戸事件	466
三 東京帝国大学法学部	470
四 山川健次郎総長演説	491
6 文部大臣時代資料	499
一 『西田幾多郎日記』より	499
二 『有光次郎日記』より	500
7 福島テレビ関係資料	533
一 創立前史	533
二 仮事務所開設	555
三 経営——「歴代の経営者」より	563
8 その他資料	565
一 遺言	565
二 書簡	566
三 日本はこれでよいか（太田耕造講演要旨）	570

太田耕造年譜	579
太田耕造執筆・演述目録	589
総索引	

凡例	716
一く五巻総索引	715
『巢鴨日記』索引	629
あとがき	717

第I部

研究篇

太田耕造の思想

1 太田精神における東と西

古川 哲史

(1) はしがき

太田耕造先生の思想・精神を知る資料としては、太田耕造全集四巻が現存するが、この全集の中にも、おのずから第一等資料と二等資料、第三等資料が分かれると私は考える。

第一等資料は、第一巻にある巢鴨日記、第三巻にある太田耕造日記鈔。この二つの日記は著者自身が書いたものであるから、当然、第一等資料としての価値をもっている。それとともに、第二巻におさめられた亜細亜大学・日本経済短期大学々々長として演述した大学の入学式、卒業式などの訓辞、祝辞の草稿ないし速記、同じ時期（昭和三十年から逝去された昭和五十六年度まで）に書かれた文章類は演述者もしくは執筆者として太田耕造の名が明記されているので、ことに教育家としての太田耕造の思想や信念を知るのに絶好の資料であろう。

しかし、第一巻と第四巻に集められている雑誌『国本』所載の論説は、執筆者の署名がある分は別として、それが欠けているものは、これを第一等資料とするのには若干のためらいが要る。私の読んだかぎりでは、太田耕造個人の述作と見るより、国本社同人一同の述作と見たほうが適当なものも散見する。筆を執ったのは太田耕造であったかも知れないが、主張する内容は太田耕造個人のものとは若干ニュアンスを異にするものもまじるよう

である。それらの文献批判は慎重な取扱いを必要とするから、ここではとりあえず第二等資料として処理したい。

第三巻は『写真で綴る太田耕造先生のご生涯』と『思い出で綴る太田耕造先生のご生涯』および『太田耕造日記鈔』の三部より成っている。『太田耕造日記鈔』の価値については、既述のとおりであるが、その他の二部も太田先生の人柄や日常を知るには欠かせない重要性をもっている。しかし、「太田精神における東と西」を主題するこの論述では、第三等資料もしくは番外資料として活用するようにしたい。

(2) 石川公一の思い出

さて、第一等資料としての二つの日記および第二巻における教育家としての発言には、どのように東と西が出ているか。

まず頻度の高い日本人を拾ってみれば、石川公一、岩田愛之助、内村鑑三、五島慶太、西郷南洲、佐藤信淵、鈴木貫太郎、杉浦重剛、竹内賀久治、田辺治通、二宮尊徳、乃木希典、広瀬淡窓、明治天皇、山川健次郎、吉田松陰、頼山陽など（アイウエオ順）。この内、石川公一については、『太田耕造日記鈔』の昭和二十二年九月一日の項に「公一電話ニ依リ夜来ル」とあるのに始まり、翌二日の項に、

「新聞ニ、キーンン検事発表、巢鴨組十五、自宅拘禁八名釈放ノ声明出ツ。野崎、大麻、平沼夫妻、以寿子、公一、本多夫妻、岩子、永戸秀助、矢萩、鈴木豊未亡人、寺内夫人。」

九月十一日の項に、

「朝、小金井公一來ル。共ニ信濃駅ニ至リ茲ニテ別レ、雪ヶ谷、永戸姉ヲ訪フ。……」